学校法人 松翠学園
滋賀文教短期大学
SHIGA BUNKYO JUNIOR COLLEGE

保育士養成のための歌唱及び発声指導～マスク装着で生まれる課題と対処法～

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-05-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 栗原, 未和, Kurihara, Miwa メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32125/00000118

保育士養成のための歌唱及び発声指導
～マスク装着で生まれる課題と対処法～

栗原　未和
Miwa KURIHARA

抄録：

2020年から続く新型コロナウイルス感染症対策でマスクの着用を余儀なくされている。全面的に解除されるにはまだ時間が必要であろう。近年、医学的また心理的にマスク着用における多様な問題点が提起されているのをしばしば耳にする。その中から子ども達の言葉の発達に影響を及ぼす可能性があることに注目し、保育士をはじめとする子ども達と日々係わる人間として心がけたい心構えと発声時に役立つ対処法を取り上げたい。

キーワード：マスク装着、聴き間違え、話し方、発声法、発音法、歌唱指導、発声指導、調音点、調音法、保育士、言葉

Ⅰ．はじめに

そもそも人間はどうやって言葉を習得していくのだろうか。「子どもが母国語を自分のものにしていく過程は、大人から教えられたことばを学習するのではない。自分から働きかける動作的な外界認知の発達や、親など周りの人とのかかわりによる情動的な認知の発達を基盤として、経験的にわかってきたことをまわりの人がどういう言葉で表現しているかを発見し、それらを使って自分なりの言語表現を創造していくのである。」[1]「あかちゃんは大人の口の動きと、そこから発せられる音を「みながら」言語を学んでいる。また難聴者の音声コミュニケーションでは、話者の口の動きも非常に重要な知覚的手がかりとなっている。わたしたちはふだんあまり意識していないかもしれないが、音声コミュニケーションにおいても、相手に視覚情報を送ることは非常に大事なのである。」[2]「一般的に、視覚情報は聴覚情報よりも強く知覚に影響することが分かっており、電話で相手の顔を見ずにコミュニケーションをとる難しさの要因の一つには、視覚情報の欠如もあげられる」[3]

赤ちゃん達が視覚から情報を得ようとしていることは筆者自身の音楽活動や子育てをとおして、実感してきたことでもある。コンサートで出会う赤ちゃん達は口元をじっと見つめて、一緒に口を動かしてくれることがある。耳と目から得た音を自分のものにしようと練習していると考える。実際の子育てにおいても興味深い事例が沢山見られた。長男Ｈには丁寧に発音を教えることを試みた。「アルファベットの歌」の子音、例えば発音の似ているＬ・Ｍ・Ｎの口唇と舌の位置を見せて反復を促したり、また「ひらがな50音」が子音と母音が合わさって出来ていること説明したりすると興味深そうに模倣して体得していた。明瞭な発音を意識して育てたため、周りの友達に比べて非常に滑舌良い子どもに育っている。かわって次男Ｔの

1　中島誠・岡本夏木・村井潤一。言葉と認知の発達。東京大学出版会。p.111

2　川原繁人（2018）。ビジュアル音声学。東京都：（株）三省堂　p.219

3　同上　p.218

時は日々の雑務に追われていたうえ、彼自身が年子の兄に興味津々で母親より兄を真似て成長してきた感があり、母親と二人だけの時間を取れなかったことや、子どもらしい発音がかわいらしくて修正しなかったことが影響して、自然体のまま成長している。

Ⅱ．マスク着用による聴音上の問題点

「読唇術」（話し手の唇の動きを読むことで、実際には聞こえていなくても何を言っているのか理解することができる技術）があるように、元来人間は意識することなく聴音における「視覚的情報」を便利に使ってきた。しかし、この２年半余り、家庭以外ではほぼマスクを常用する時代となっている。子ども達の目にするマスクをしていない大人は家族かTVやYouTubeの中の人だけといっても過言ではない。マスク着用下においては視覚に全く頼れないことに多くの人が動揺することとなった。

マスク非着用時と同じように発音しても口の前の「フィルター」を通すとまず視覚が奪われ、音自体も覆われてくぐもった音に聞こえる。さらにマスクを装着した不自由さから口呼吸になり体調を崩しやすくなり、表情も乏しくなり、巷では表情筋の衰えが美容関連の話題として取りあげられる程、明瞭な発音に必要な口唇と舌の動きを鈍化させてしまっている。

もちろん、感染症対策や衛生面でのマスク着用を否定するものではない。しかしマスク着用による弊害はコロナ以前の過去のいくつかの研究でも「子供に声が届きにくい」「保育者の表情（感情）が子供に伝わりにくい」[4]「歌や読み聞かせへの反応が減った（薄くなった）」聴覚面でも「聞き返される回数が増えた」[5]など散見できる。

次男Ｔは３歳になってすぐコロナ渦に見舞われた。筆者が長男Ｈの時ほど丁寧に発音に特化して教えていないせいもあるが、あまりに歌の歌詞や名前などを間違えて覚えてくることが多いので、視覚的情報に頼らず聴覚情報のみに頼るためではないかと考えている。言葉を既に習得している大人同士には聴き取れる音も、日々沢山の未知の単語に出会っているだろう子ども達には不案内なのでないか。おおらかな本人の個性もあり、訂正してもあまり気にしない様子だったが、最近字を書けるようになったことで判明したことがある。一日に何回もお名前を呼んでいる担任二年目の大好きな「デいな」先生が、実は「れいな」先生だったのだ。さすがに自分でも驚き目を白黒させていた。【de】と【re】、似通った子音を混同している。

歌においても同様だ。保育園で童謡「浦島太郎」を習ってきて意気揚々と歌うのだが、

むかしむかし　浦島は
助けた亀に　つネられて（◯連れられて）
竜宮城へ　イッてみれば（◯来てみれば）
デにも（◯絵にも）かけない　美しさ

この短い童謡の中でも３ヵ所も修正すべき点が見つかる。

---

[4] 西舘有沙。マスク着用が保育に及ぼす影響に関する保育者の認識。富山大学人間発達科学部紀要　第10巻第２号。2016：125-130　p.128

[5] 七木田正美。保育者のマスク着用が保育や子どもに与える影響。比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究 Review of the research on teachers training 7: 2021.3 p.167-175　p.171

Ⅲ．なぜ言い（聴き）間違えが起こるのか

そもそも、言い（聴き）間違いはどのようにして起こっているのか。

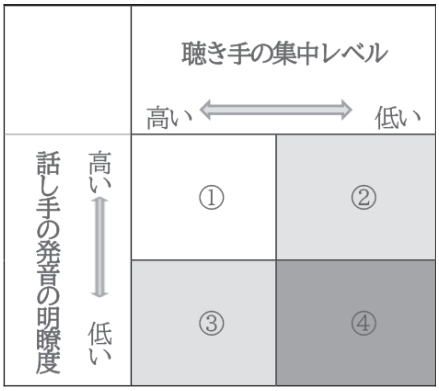
人の会話において話し手と聴き手の関係には４つのパターンがあり、会話の理解度に差が生じる。【図１参照】

① 話し手―明瞭な発音　聴き手―集中している

② 話し手―明瞭な発音　聴き手―集中していない

③ 話し手―不明瞭な発音　聴き手―集中している

④ 話し手―不明瞭な発音　聴き手―集中していない



【図１】

当然ながら①のように明瞭な発音で、なおかつ聴き手も聴く姿勢が整っている時は理解度も高いが、どんなに明瞭であっても聴き手側が受け取る姿勢でない②の場合は残念ながら理解度は下がる。また、③のように話し手の言葉が聴き取りづらければ、どんなに集中していても聞き取ることは出来ず、そのうち集中力も削がれ、聞くことを諦めてしまうだろう。④の場合はもはや会話は成り立たず、独り言である。

では前述の「浦島太郎」の場合を考えてみよう。なぜ言葉が違ってしまうのか。

【考察１】発音が間違って聞こえたため新しい言葉として習得した

間違えている浦島太郎の４段目◎「デにも」◎の部分に当たる。そのような言葉はないけれど、新しい言葉（まだ意味は分からずとも、とりあえず音）として「習得」した部分と考える。

【考察２】正しく聞こえていたが、知っている言葉に修正した

子ども達は大人に比べて日本語の語彙力が少ない。聞きなれない表現だった場合、自分の知っている言葉に置き換えてしまったのではないか。（私たちがなじみの薄い外国語を聞いた時のように。）

２段目「つネられて」の部分を見てみよう。助けてあげたのにつねられてしまったとは太郎もお気の毒だが、「連れられる」より「つねられる」方が次男Ｔにとっては馴染み深い動詞であった可能性は否定できない。

これはコロナ渦における子どもたちだけの問題ではない。元来、童謡でも大人であっても多くの人が間違えて覚えている歌詞がある。口伝えで覚える場合、音真似するだけだと意味の分からないまま、つじつまの合わない歌詞で覚えてしまう。

例）「どんぐりころころ／どんぶりこ」 ⇒ ×どんグりこ

「アルプス一万尺／小槍の上で」 ⇒ ×こやギ

意味を考えるとしっくりはまらず、縦詩を読んで本来の内容を理解することもままある。馴染み深い曲ですら、改めて考えるときちんと意味が分からないまま歌っていることはよくあることだ。

自分が楽しんで歌う場合はいかような歌詞でも構わないが、保育者として歌を使用する際は正しい歌詞で、内容を正しく伝えてもらいたい。筆者自身の幼稚園時代の記憶でも小さいながらに曲の中の世界を鮮やかに想像して楽しんでいたものだ。歌詞が違うと歌の世界観が変わり、おかしなことになりかねない。

歌は皆の気持ちをまとめるためにも用いる。合唱する際、内容を皆で共有することは良い演奏のために必須な作業である。

Ⅲ-１　文字の利用

今回、本論文を執筆するにあたり、数名の子育て経験者の方々から様々なご意見をいただいた。その中

にやはり「娘が幼稚園時代にずっと歌詞を間違えて歌っていた。」という経験を聞かせてくださった。その事例の幼稚園では、卒園時に先生と共有したことで、それから日々歌う歌の歌詞を壁に貼り出すようにしたという。

歌詞を可視化することは筆者も有効であると考える。３歳児、つまり幼稚園児にもなれば少しずつ文字への興味を持ち始める。（例えば食卓に置いてある牛乳パックに何が書いてあるのか気にし始める。）無理に読ませようというのではない。耳で聴いた音を発音するだけでなく、文字情報を「形」として目から取り入れることで、自ら文字を読み、音と内容で理解しようとする過程を経て、聴き間違いが減らせるのではないかと考える。

長男Ｈが幼い頃、新幹線の「はやぶさ」を「ハブチャ」と呼んでいた。あまりにかわいらしかったので修正していなかったのだが、残念ながら彼は文字を読めるようになったのが早かった。親は特段何もしていないので恐竜や電車の図鑑を隅々まで眺めて、読み聞かせやDVD、動画等を観て得た音と文字を見ているうち自然と習得したようだ。ある日、一人本を読みながら衝撃の独り言を言った。「あ、なんだ。『はやぶさ』なのか。はんちゃん『ハブチャ』だと思ってた。」それ以来正しく発音できるようになってしまい、ただただ残念であった。しかし、文字を使って可視化することの有効性を実証したわけだ。

さて、先程から「言い（聴き）間違いを防ぐ」ためにはどうすればいいかを書き連ねてきたのだが、音声学者・川原繁人氏の著書の中からいくつか紹介しよう。

- 発音法の似ている音を混同してしまうのは①発音できないわけではない、②言いやすいからでもない[6]。
- 言い換えた音を、違う音の時に使用するchain shiftと呼ばれるこの現象は言語学の最新理論をもってしても解明されていない問題だが、「子どもの能力の欠如ではない」ことは明らか[7]。
- 時に我々大人は、子どもたちを「大人ならできることができない未熟な存在」と見なしてしまう。しかし彼ら彼女らなりの理屈をもって音声を発していることは間違いない[8]

一人一人個性もあり、多大な可能性を秘めている全ての子どもたちへの大いなる愛情と尊敬を感じる視点で、非常に参考になった。川原氏をはじめ音声学者の方々の今後の研究成果を期待したい。

そもそも、子どもの言い間違いや舌たらずな話し方はとても可愛らしく、母性本能をくすぐるものである。我が子であれば、いつまでも幼いままの口調で聴いていたいものだが、やはり言葉を間違えて覚えてしまっている場合、いつまでも「光る」を「ピカる」と言っているのを放置するわけにはいかない。就学が近い年齢になったらさりげなく修正しておきたい。その子が将来、どこかで恥ずかしい思いをするかもしれず、場合によってはそのことが自尊心を挫くきっかけになってしまうかもしれないからだ。次男Ｔの場合、５歳になったタイミングで「『ピカる』という言葉は、本当は『ひかる』という言葉だ」と教えたら恥ずかしがり、もっと早く教えてほしかったと叱られた。小さい頃は園で大好きな先生から教わってきたことは絶対であり、たとえ親である筆者が訂正しても「でも、うちの園ではこうやで。」と頑なで、なかなか修正してもらえなかったのに。言葉の小さなことではあるが、日常の些細な出来事が将来にどう繋がっていくか、子どもと関わることは楽しくもあり、重責を担うものでもあると日々感じている。そのた

6　川原繁人（2022）音声学者、娘と言葉の不思議に飛び込む。p.136

7　同上　p.136

8　同上　p.137

めにも最初から「聴き間違い」を防ぐために、できうる努力はしておきたい。

Ⅳ．聴き取りやすい発音法

ここまで問題点を整理してきたが、ここからは「聴き取りやすい発音法」を取り上げたい。また、なぜ聴き間違えやすいのか、調音点の似ている音を３グループ取り出して整理してみたい。『調音点』とは「口のどこを使って音を出すか」、『調音法』とは「口をどのように使って音を出しているか」である[9]。私たちが普段何気なく使っている音はどう発音されているのか。

Ⅳ-１　日本語における「調音点」「調音法」

①　両唇音【p/b/m】…調音の際に両唇が閉じる音。

【p】…無声両唇閉鎖音及び破裂音。

【b】…有声両唇閉鎖音及び破裂音

【m】…両唇鼻音。

		調音点								
		両唇	唇歯	歯	歯茎	歯茎口蓋	後部歯茎	硬口蓋	軟口蓋	喉頭
調音法	閉鎖音	p b			t d				k g	ʔ
	摩擦音	ɸ	f v	θ ð	s z	ɕ ʑ	ʃ ʒ	ç		h
	破擦音				ts dz	tɕ dʑ	tʃ dʒ			
	鼻音	m			n				ŋ	
	流音				l r					
	半母音	w						j		

表 2.5-1：調音点・調音法・有声性のまとめ。日本語か英語に現れる音に限る。

②　歯茎音【t/d/n/l/r】…舌先を上げて口腔内を閉じる音

【t】…無声中歯茎破裂音

【d】…有声中歯茎破裂音

【n】…有声中歯茎鼻音

【l】【r】…有声歯茎弾音

閉鎖音	口腔と鼻腔両方が閉じている。
摩擦音	鼻腔は閉じているが、口腔が微妙に開いている。
鼻音	口腔は閉じているが、鼻腔は開いている[12]。
流音	鼻腔は閉じているが、口腔があまり閉じていない。
半母音	鼻腔は閉じているが、口腔はほとんど閉じていない。

表 2.3.1-1：調音法のまとめ。下から二つをまとめて「接近音」と呼ぶ。

③　接近音【j／w】…口腔内での狭めがあまり強くなく舌と口蓋や両唇が近づくのみ

【j】…有声硬口蓋半母音

【w】…有声両唇半母音

上記の②歯茎音【d】と【n】と【r】を例にとって考察してみる。

３つとも「有声」で「中歯茎」部分で発音される子音であるが、【d】が溜めた空気を「破裂」させることで発音されるのに対し、【n】は鼻の方に空気を通す「通鼻音」、【r】は「弾音」という違いがある。

この３つの音をｕの母音をつけて連続して発音「ドゥ・ヌ・ル・ドゥ・ヌ・ル…」としてみる。発音の違いは明らかだ。

次に鼻を摘んで同じ発音をしてみると先程と比べると違いが分かりにくくなったのではないか。さらに調音法自体を曖昧に発音すると、もはや混同してしまっても仕方がないと感じる。

試しに次男Ｔで聴き取りやすさの実験をしてみた。明瞭な発音の時は一緒に「ドゥ・ヌ・ル・ドゥ・ヌ・ル…」と面白がって唱えてくれたが、鼻をつまんだ場合、さらに曖昧に発音した場合と続けると「ぬ！ぬ！ぬ！ぬ！ぬ！ぬ！…」と連呼しはじめ、途中で逃げられてしまった。実験は途中で断念してしまったが、図らずもⅢ章で分類した③「話し手―不明瞭な発音　聴き手―集中している」の会話を続けていると聴き手は集中しなくなり、④「話し手―不明瞭な発音　聴き手―集中していない」の状態になり、しまいには会話が破綻することを体験することができた。

9　川原繁人（2018）。ビジュアル音声学。東京都：（株）三省堂。p.36。本ページ掲載の２つの表も借用。p.39、p.57

Ⅳ-２　マスク装着時の発声・発音における注意点

つまり、そもそも言葉とはマスクがあろうとなかろうと、明瞭に発音しないと間違って聞こえてしまう要素満載なのだ。できるだけ聞き間違えを防ぐためには、話し手がそのことを意識した上で、視覚要素がなくとも聴き取りやすいよう、明瞭な発音をするのみであると考える。子音も母音もそれぞれクリアに発音し、ゆっくり明確に発音することが大切である。加えて、身振り・手振り・感情の表現等、わかりやすく大きく表現して単語の持つ力を聴き手にしっかり受け渡すことも重要である。

「母親は子どものレベルに応じて、自分の発する言葉遣いを文法的・意味的レベルやスタイルを微妙に変化させ、コミュニケーションとしては、相互同期的なものとして、子どもに共鳴・賛同するように、期せずしてレベルやスタイルを調節していくのである。」[10]保育園や幼稚園、こども園の職員は、子どもたちの保護者と同じく、子どもたちの言葉の発達に大きな影響を与える存在である。そのことを自覚し、聴き手である赤ちゃんや子どもに寄り添い、子どもたちの言語習得の助けとなるよう明瞭な発音、発声を心がけてもらいたい。

Ⅴ．マスク着用時の発声・発語のために

筆者は声楽家として、オペラや演劇、コンサートなどの舞台に長年携わってきた。学生時代には日本歌曲歌唱における日本語の表現法や発音法についての論文を記し、現場に出てからは歌うだけでなく台詞を伴う舞台も多く、日本語の発語法に表現者の立場で20数年真正面から向き合ってきた。

その経験から、本学において指導を始めてから、ピアノ演奏や歌唱に留まらず、保育士・教員として子ども達に向き合う上で必要と思われる言葉を伝える「舞台語」の技術を発声法も含めて伝授してきた。卒業生に「現場に行ってとても役立った」と言われて非常に教師冥利に尽きたものである。当初は歌に興味のない学生達をどう導けば良いか悩んだものだが、普段使っている言葉であるのに新しい発見があり、かつ即効性があるので、皆恥ずかしがりながらも前向きに取り組んでくれる。

コロナ渦においてはなかなか以前のような発声指導をすることができず非常に歯がゆい思いをしているが、こうして「マスク」という障壁を乗り越える発声を考えることは悪いことではない。マスクを通すために、ただ「がなる」ように大きな声を出すのではすぐに喉を痛めてしまう。それは騒ぐ子ども達の中で発声する時と同じことが言える。のどに負担の少ない発声と明瞭な発音で得られる「通る声」が目標だ。

人前で話をする人にとって、少なからず『舞台語の発声法』は必要だと感じている。お読みいただいたどなたかの参考になれば幸いである。それでは、まずは基本である歌唱時の呼吸法からみてみよう。

Ⅴ-１．歌唱時の呼吸法

呼吸とは、息を吐き、吸うことで、人間を始め地球上の全ての生物は呼吸して生きている。わざわざ「歌唱時の」と付けたのは「歌を歌うことは非日常的なこと」であるからである。日々鼻唄を歌っている人はいるかもしれないが、例え我々仕事にしている人間であっても歌で会話はしない。つまり、歌うためには話す時とは違う呼吸法が求められる。これは劇中で台詞を言う時、また人前で発表する時など、いわゆる舞台語発声時においても使用する。マスク着用時はぜひこの呼吸法を意識しよう。

呼吸は歌うために重要な役目を果たしている。

---

[10]　参考文献２。P.100

① 声帯を震わせる

呼気の時、声門を閉じて空気を通すと声帯が震え、音が出る。これが声の元である。声帯が震えただけではまだ言葉のない、いわゆる「あいまい母音」が誕生する。口腔の形を変化させることで様々な母音に変わるのである。

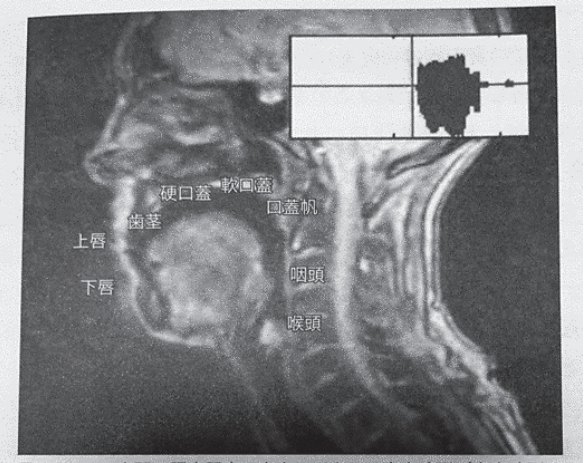


図 2.2.1-1：人間の調音器官。右上のパネルは音声波形（音声波形については音響音声学の章を参照）。

② 身体を広げ、支える

歌を歌うことは、身体を楽器にすることでもある。ヴァイオリンもピアノも太鼓も管楽器も堅固な枠組があり、中に空洞が作られている。発生した音がその空洞に響き、豊かな音色になる。歌の場合も同じく、声帯という小さな器官で作られた音を身体に響かせている。呼吸によって広げた共鳴腔をぶれないように支えておくことが必要である。

ペットボトルとストロー、風船、ビニール手袋を使って作った肺の模型[11]で説明してみよう。ビニール手袋で作った横隔膜を引くと肺である風船が膨らむ。手を離すと風船が縮む。この時、骨格であるペットボトルがしっかりしていない素材とどうなるだろう。横隔膜に値するビニール手袋の膜を引っ張るとペットボトルが凹んでしまう。その場合、風船は膨らまない。

歌を歌う上で行なうブレスコントロールは、横隔膜の動きを統制することである。息を吐き始めた時一瞬にして萎まないように、また枠組である体幹を崩してしまわないよう、しっかりと体を支え、身体を広げ続けていることが求められる。

③ 鼻呼吸

鼻から深呼吸をしてみよう。口で深呼吸をする時と違う部位が膨らむのがわかるだろうか。口呼吸の場合、硬口帆が閉まり鼻への響きの通りを塞いでしまう。鼻呼吸は②で述べた腹式呼吸の筋肉へと働きかけ、横隔膜を下げ、支える。自然に下腹部を意識し、体全体で呼吸を支えることができる。

また、共鳴腔の確保の意味でも重要な役割を担う。声は口に抜ける響きと鼻に抜ける響き、二つの響きが合わさって聴こえている。鼻から抜ける響きは高周波音、また言葉の発音においても通鼻音など明瞭度を左右する。ただし、②で行った身体の支えを行わずに鼻に空気を送り込むだけを意識してしまうと常に鼻音化してしまうので注意が必要である。

Ⅴ-２．発音法

① 危険なワード「口を大きく開ける」

言葉を発音する時、これまで順に整えてきた身体を発音によって崩さないようにしたい。よくある危険なキーワードが「口を大きく開ける」という表現だ。言葉を明瞭に発音するためによく使われる（筆者自身も使用する）。危険なのは、体制や呼吸を整えず、ただ「あごを下げる」と喉声の方に誘ってしまう可能性がある。鼻呼吸で膨らんだ気道や硬口蓋、そして体の支えを意識して、欠伸をするように柔らかく発音しよう。

② 子音と母音

日本語は漢字・ひらがな・カタカナで表記されるが発音はどうだろう。子音と母音がミックスされた音

---

[11] 川原繁人（2022）音声学者、娘と言葉の不思議に飛び込む。

が表記されている。先程子音の「調音点」「調音法」を見直したように複雑に発音される子音と５つの母音による複合音で成り立っている。

日常会話の際、我々日本人は口を閉めるように母音を発音しがちである。試しに普通に「イ」と発音してもらいたい。鏡で確認すると口を横に引き、歯がほぼ閉まって見えるはずだ。次に前述の鼻呼吸で上がった硬口蓋の位置、体の開きを確認しながら発音してもらいたい。同じように「イ」と発音しているはずなのに、歯が１センチほど開いていると思う。その姿勢で「イエアオウ」と発音してもらいたい。普段の話し方より口腔内が広がったことで舌も自由に動く空間が生まれ、明瞭な発音が発せられていることに気づくだろう。

Ⅵ．終わりに

最も、近年モゴモゴ話す若者が増えていたのはコロナ前からの社会現象であった。母音の変化も「時の流れ」なのであろうと考える。この拙文はその流れを「正す」というよりは、人と人のコミュニケーションを円滑に運ぶためのアドバイスである。コミュニケーションが必要な現場で会話が成り立たなければ揉め事の種になりかねない。時代がいかに変わろうとも人と人との意思疎通は大切であり、結局のところ、相手が子どもであれ大人であれ、会話にしろ歌唱にしろ、相手に対する「思いやり」の心、つまり相手に自分の話す言葉を伝えたいと思う気持ちの有無なのではないか。

言葉が重要な役目を担うのは言うに及ばない。マスクという壁を一枚隔てなければならないこのご時世、新しい様式として今一度話し方を見直してみてはいかがだろうか。

謝意

この論文を執筆するにあたり、ご意見をくださった知人・友人の皆様、中でも呼吸法についてさまざまなスポーツを踏まえた呼吸法をアドバイスくださいましたパーソナルトレーナーのShizuka先生に感謝申し上げます。そして研究対象として多くの事例を提供し、実験に協力してくれた息子たち―春紀と輝己―に大きな愛を送ります。

参考文献

１．川原繁人（2018）。*ビジュアル音声学*。東京都：（株）三省堂
２．服部照子・岡本雅子編著。*保育発達学〔第２版〕*
３．中島誠・岡本夏木・村井潤一。*言葉と認知の発達*。東京大学出版会
４．針生悦子。*赤ちゃんはことばをどう学ぶのか*。中公新書ラクレ
５．七木田正美。*保育者のマスク着用が保育や子どもに与える影響*。比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究 Review of the research on teachers training 7: 2021.3 p.167-175
６．西舘有沙。*マスク着用が保育に及ぼす影響に関する保育者の認識*。富山大学人間発達科学部紀要　第10巻第２号。2016：125-130
７．足立紀子。*子育て家庭および保育現場におけるコロナ化の影響と変化の一考察―保育士課程に在籍する学生の視点をとおして*―掲載誌 比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究 Review of the research on teachers training 7: 2021.3 p.167-175
８．川原繁人（2022）*音声学者、娘と言葉の不思議に飛び込む*。

栗原未和　子ども学科非常勤講師・声楽